

中井弘関係文書の紹介(二)

黎明館が収蔵している中井弘関係文書二三巻、三五四通のうち、前回は九〇通を紹介した。今回は、板垣退助から鍋島直大までの五七人、一三八通の書簡の解読文を紹介する。



明治6年パリで大久保利通を囲む県人会
(中列向かって左から2人目が中井弘)



(海江田信義書簡)



(黒田清隆書簡)

- (注) 書簡の解読については前回と同様、次のようにした。
- 1、解読順については、年代の考証はしていない。巻物にしてある順番である。
 - 2、漢字は原則として常用漢字を使用し、変体仮名は現行かな文字に改めた。
 - 3、「」は封筒、もしくは上包である。
 - 4、解読にあたっては、堂満幸子氏の協力を得た。深謝の意を表する次第である。

塩満郁夫

四、板垣退助

1、「中井弘様 小石川区小石川新諏訪町十五番地 板垣退助

親展 十二月十六日

拝啓、向寒之候益御勇健ニ被為在御起居、奉慶賀候、陳者、予而略御約束致置候鱒之板身モ近来製造相休居候得共、別ニ注文致候而、漸々出来候ニ付、御贈申上候間、御叱置可被下候、而シテ曇日、玉之花瓶御戻シ可被下旨、御申越有之候得共、其佩ニ打過候処、此頃他へ相見セ申度儀有之候、因テ此者へ御附与冀度、此段得貴意候、先者右迄、余ハ在他日候、草々、頓首

十二月十六日 板垣退助

中井弘様 卓下

2、「中井弘様 板垣退助

貴酬 一月十八日

華墨拝読仕候、儲御上京之処、御不快との御義、時節柄御加養專一ニ奉存候、小生義も頃日感冒ニて加養罷在候ニ付、快気次第御報可申上候間、此段宣布御了承可被下候、先者右迄奉復候 頓首

一月十八日 板垣退助

中井弘様 卓下

3、「築地二丁目戸谷方ニて 中井弘様 板垣退助

案下 一月廿三日

拝啓、陳者而之花瓶昨日駒田をして御遣し被降、正ニ落握仕候、小生も感冒ニて加養致し居候間、何れ快復之上、御面話可仕候、頓首

一月廿三日 板垣退助

中井弘様 卓下

4、「築地二丁目十一番地 戸谷方 中井弘殿 板垣退助

啓覆、貴著大日本財政総覧及明治財政要鑑、細川雄二郎氏を以て御寄贈被降、難有拝受致候、浩瀚之編纂、多年御苦心之程奉察候、尚御同志中へも吹聴致し、購読致候様賛助可致候、先ハ御答礼迄、草々、不宣

中井弘殿

五 井上馨

1、「中井弘殿 馨

拝復

拝読、昨日御出京、早速御尋被下候由、奉謝候、只今来客中ニ而、御断申候間、何卒明朝八時頃御来駕被成下候ハ、好都合ニ御座候、御答迄、匆々、拝復

十日 馨

弘様

2、「中井弘殿 馨

拝答

拝読、御願之品夫々御取集被下、奉謝候、何レ代価者御申越し被下度先者一応之御礼迄、匆々、頓首

六月十一日 馨

弘様

3、「中井少書記官殿 井上工部卿

至急

上野^江書狀被付候処、同氏も母上一別仕度候間、千万午御手数、今晚三条より帰り懸第九字頃、御宅^江お姿あらんと、御招キ置被下候ハ、御一同にて行懸り申聞セ之上にて、上野^江も申遣し度候間、否御答此者^江奉承候、草々、拝具

二月七日 馨

弘様

4、「中井工部権大書記官殿

井上外務卿

至急

御面晤致度義有之候間、即刻外務省へ御出向被下度致希望候也

十二月十七日 井上馨

中井弘殿

六、井伊直憲

1、「中井弘殿 井伊直憲

二品添

口演、滋賀県御在治中ハ、不一方御尽力ヲ蒙リ難有、此度之御転任ハ偏^ニ残念^ニ奉存候、就テハ、近日御引継ノ為メ御出張之趣、御苦勞^ニ奉存候、扱此紹耄疋乍御粗末、到来^ニ任^七進覽致候間、御土産^ニテモ被成下度、又麦酒一タアース添へ為持上候^ニ付、宣布御採納被成下度候

五月廿六日 井伊直憲

中井弘殿

七、伊地知正治

1、「工部省権大書記官中井弘殿

親展

照国神社ハ薩隅日三州之庶民普ク崇敬スル所、豈計ン明治十年ノ兵燹^ニ罹リ、靈社灰燼^ニ帰シ、併セテ朝廷恩賜ノ宝刀ヲ失ヒ、靈威ヲ損スル^ニ至ル、嗚呼、県民ノ悲傷実^ニ想フヘキナリ、是^ニ於テ有志者為メ^ニ協力大挙シテ靈社ヲ再建シ、朝恩ヲ再ヒシ、彼ノ神靈ヲ慰シ、此民心ヲ安ンセンコトヲ図リ、曩キニ、朝旨ヲ仰キシニ、特別ノ聖旨ヲ得、再ヒ御太刀ヲ下付セラレタリ、因テ建築ノ図式ヲ製定シ、其經費ヲ算スル^ニ金八千余円ノ額ヲ要ス、乃チ県民ノ醵金ヲ以テ該社造営ノコトヲ請願セシ^ニ、県庁モ亦嘉納スル所アリテ許可セラレタリ、然リト雖、県下兵災ノ余ヲ受ケ、人々未タ余資アラサルヲ以テ、其醵集スル所ノモノ、稍該費ノ半額ヲ得ルノミ、未タ其志望ヲ達スルコト能ハス、故^ニ頃日豎山八郎上京シテ、現時官途^ニ在ル同県士民ノ協力ヲ仰カンコトヲ謀ル、靈神ノ世^ニ在スヤ、予等素ヨリ粉骨碎身、以テ恩遇^ニ報セサル可ラス、今日何ソ昔日ノ恩義ヲ忘却センヤ、冀クハ各位協力、別紙記載スル所^ニ準拠シ、以テ寄附アランコトヲ希望ス

明治十三年七月 吉井友実

伊地知正治

記、一月俸三百五拾円以上 金百円ヨリ不少、^一、同貳百五拾円以上、^上、金五拾円、^一、同貳百円、^{金三拾円}、^一、同百五拾円、^{金貳拾円}、^一、同百円、^{金拾五円}、^一、同百円以下、^{金拾円}ヨリ不多、^一、前文金額一時^ニ出スヲ欲セサル諸賢ハ、来ル十月迄^ニ三ヶ月間^ニ割合出金アルモ妨ケナシ

前文金額之標準ヲ概定スト雖、其多少増減スル所アルハ諸賢ノ都合^ニ任ス

一、金子ハ第五国立銀行ニ御託附ヲ乞フ

別紙ニ通差出候条、旧藩ヨリ御省へ奉職諸君へ御回附、有志出金之員
数並姓名来ル八月中迄ニ拙者共迄為御知被下度、此段及御依頼候也

七月廿七日 伊地知正治 吉井友夷

工部省権大書記官中井弘殿

八、井上毅

1、「築地老丁目 中井弘殿 牛込区市谷薬王寺前町八拾番地

親展 井上毅

中井氏囑托之西郷氏邸内鉄道線通過之儀ニ付、御通報之旨委曲拝承、
折角注意可致様、測量方へ早速可申達候、奉復迄、匆々

四月三日 井上

松方様

追而中井氏ヨリ之書面致返進候、且又、明日ヨリ兩三日長浜ニ滞在之
筈ニ付、若哉其辺御通過も候ハ、一寸御しらせ被下度候

九、岩下方平

1、薄暑候得共、益以御安康大賀奉存候、陳ハ、花牟礼ト申者、兼而御依
頼申上置候処、当地ニ而ハ、弥官途六ヶ敷候故、御地へ向テ罷出候付、
可然奉願候、今日柄之儀ニ付、望通ニハ参りかね可申候得共、先活命
之道さへ有之候得ハ、宜敷存候、何とか御工風被下候様奉願候、尚当
人より縷々可申上候、当地市立之不景氣喧敷、他ニ面白嘶も承不申候
右、願上度、匆々、頓首

六月廿二日 岩下方平

令公 侍史

一〇、岩倉具視

1、御使ニ而参上致候ニ付、御面会有之度候也

八月一日 岩倉

山県伯閣下

一一、岩倉具定

1、「工部省 中井弘殿 岩倉具定

親展

前略御免、然者明二十六日、於拙邸囲基会相催候間、若御用閑候ハ、
御来会被成下度、此段申試候、御承諸候ハ、午後二時比より御出被
下度候、仍而匆々如此御座候、頓首

九月廿五日 具定

中井弘殿

具定

中井弘殿

一二、上野景範

1、「中井弘殿 上野景範

煩貴答

拝読仕候、安田氏居宅之儀ニ付而ハ、早速御尽力被下、只今より一覽
之為出張仕、其上にて御返答可申上含ニ有之候得共、其中御礼申上置
候、昨日貴宅にて拝見仕候小室氏より御貰受之班竹ハ、最早他ニ御使
用之道無之候ハ、四本文ケ小生方之班竹ト御操替被下間敷や、尤小
生方之分ハ、七部之徑にて、長サハ八尺位有之、班紋ハ余程立派ニ有
之、右を八本差上候様可仕、何分之御答至急奉願候、不尽

三月十七日 上野景範

中井弘殿

2、「中井弘殿 上野景範

至急御親展」

過日御世話被成下候^{ビヤノ}代残百円、只今入用有之候間、此者江御渡可被下候、外^ニ五十円暫時之間恩借相叶候ハ、難有奉存候、右、御願迄、勿々、頓首

十一月廿三日 景範

中井殿

3、「中井弘殿 上野景範

貴答 午後三時十分出ス
拝承、精養軒^ニ而 御待被下度候也

四月八日 景範

中井君

4、「中井弘殿 上野景範

御内披」

例之高輪邸ハ、千二百円にて売却いたし度候間、速^ニ手順相運候様、御取計可被下候、右、御願迄如斯候也

十二月卅日 上野

中井殿

一三、内海忠勝

1、「京都府上京御幸橋西流北へ入 中井弘殿 神戸市布引

親展 内海忠勝」

拝呈候、頃日新紙^ニ御病氣之由拝見、素より一休之事とハ存候得共、昨今如何之御容体^ニ候哉、氣候交遷之折柄^ニ付、篤と御養生肝要と奉

存候、右、不取敢書中を以御見舞まで、如此御座候、草々、敬具

十月八日 忠勝

中井老台

一四、榎本武揚

1、「中井弘殿 榎本武揚

差置」

此品^者、東上総産之大鯛魚を極新鮮之中、薄塩^ニ致たる者^ニ候、外皮を剥き、三枚^ニ卸し、酢にて御味ひ有之候て、洋製之ヘーリングに劣らぬ様存候間、乍些少差進候、尤薄塩之事ゆへ、急て御尽し被成候方^ニ御座候、早々、不^一

弥生初四 武揚拝

桜洲老兄 台下

2、「中井桜洲先生 榎本梁川

拝復 コノワタ壹壘添」

種々之好下物頂戴いたし、難有御礼申上候、会津学校云々、幾分歎助力可仕候、余期拝晤、不宣

三月十九日 武揚

桜洲老兄 肅皮下

コノワタ一壘差上候、これは、頃日九州より来京之者持越候もの^ニ御さ候

3、華翰拝披、久々不得拝眉候処、御無事御帰府之趣下心仕候、拙生も依然頑健罷在候間、御安心被下度候、拙生義、明朝より函根江出立、大凡二週間はかり逗留之見込^ニ御座候間、帰京后、拝晤之上、御経歴地

方之景況相同、將夕御周旋被下候鏡之事共も可申上候、御高吟二首御示し被下、朗誦仕候、いづれも当日御跋涉之景色を見る如く、御同行之縁なかりしを憶むのミ、上野氏^ニ者、定て既^ニ御面晤有之しと存候、青木氏も明日頃着之日數^ニ御座候、追々駐歐之同僚帰来、一良日をトシ、対床活旧を樂しミ居候、余讓拝晤、草々、不^一

八月廿日 武揚

中井老兄 座下

4、拜啓、陳^者来ル二十九日看劇之御約束致置候処、無扨用向出来、乍残念御断申上候、魯特レツツフスキー氏^者、一昨朝浦塩港より長崎江向ヶ出帆致候間、多分十二月之三四日迄^ニ者、横濱着と被存候、右等、得貴意度、余讓拝晤、不^一

十一月廿七日 梁川拝

桜州大兄 梧下

二白、乍些少長州之鯨肉、東察加産之煙鮭差進候間、御笑味被下度候
5、「中井工部権大書記官殿 榎本武揚

拜復 一

御紙面拝閲、いづれ近日之中、委細取調可達候

九月十六日 榎本武揚

中井弘殿 床下

一五、大東義徹

1、拜啓、事務所之外部一覽候処、漸ク棟上り、瓦葺着手中^ニテ、目下之形勢、且普請之光景ト相伴ス、願ク一日も速^ニ、利用相成候御工風被成下度、折角之御計画、今日之有様^ニテハ、閉会迄^ニ引移、如何可有之

ト掛念之余り一書ヲ呈シ、督促之嚴命ヲ冀望之至^ニ不堪、早々、拜具

二月三日 大東

桜洲先生 研北

2、「中井弘殿 大東義徹

滋賀県民 久保弥十郎携^一

拜啓、滋賀県下阪田東浅井郡分合之義^ニ付、貴族院へ諸願書呈出候、右、紹介之義、閣下へ御頼申上度趣旨、御許可被遺者、万幸之至^ニ候、右、御頼旁、紹介仕候、頓首

一月廿八日 大東

中井弘先生

3、「江州大津 中井弘殿

親展^一

拜啓、天象不相変不順^ニ御座候、老閣御清穆奉賀候、拜別翌日帰京仕候処、相馬事、俄然脳充血ノ為メ、一時昏倒セシカ如シ、尔後精々養生被在候得共、墓々敷無之、併追日軽快之順序^ニ御座候得共、医案^ニヨレバ、不順之氣候身体及精神過勞等ハ、再患之慮ナシトセス、仍暫時静肅何事^ニも干係セサル様忠告ナサレ候次第^ニ御座候、老接内諭之趣も現^ニ已^ニ如前条光景^ニ而、充分之協議も行届不申、遷延今日^ニ相成候、猶、暫時御全快^ニも難及候哉^ニ相見候間、十日前後^ニハ再び拝顔之子約ヲ奉スル能ス、不時之疾病、誠^ニ無扨次第御座候間、不惡御承諾被成下度、此段申上候、御滞留ハ大凡何日月頃迄京阪地方^ニ御消光被為在候哉、右、御東遊之長短^ニヨリ貴地方^ニ於^ニ而、拝顔ヲ得ヘキ哉否、予計仕度候間、乍御手数、御一報被成下候^ハ、幸甚之至^ニ御座候、

要旨申上耳、草々、拝具

七月十一日 大東義徹

中井桜洲先生 侍曹

4、「京橋区築地貳丁目 中井弘先生 麹町平河町五丁目廿八番

拝復

大東義徹

拝覽、直ニ鈴翁へ貴命之趣申遣候、揃面会之懇篤ニ高諭相伝可申也、
全人住所ハ左ニ、麹町区四番拾四号、不取敢御通報御頼

十一月十九日 枕流

桜洲老閣 机下

5、「京橋区築地貳丁目 中井弘殿 於衆議院 大東義徹

親展

」

拜啓、滋賀県会建議案、郡所分之模様該地へ御尋遣之返辞參着致候哉、
新聞上ニヨレハ、議場ニ於テ知事強迫サレ、頗ル色動もの、如シ、万
一建議案決議之為、知事脳髓迄動揺シ、前議ヲ蔑視スルニ到テハ、將
来県治上不容易悪例ヲ、爰ニ初テ創始致候ハ、多弁ヲ領セス、容易ニ

前決心ヲ変スル如キ心腸男兒ニも之有間敷候得共、前橋及鉄道築堤、

瀬田川事件等、前途ニ横臥スル地方問題ニ憂慮シ、県会之意思ヲ重ス

ル精神者、分合之本領ヲも併せ動揺シ、重キヲ失シ候如ハ万々有之間

敷候得共、宜シク御注意、万一二も躊躇之事実御座候ハ、一勢援ヲ

投セラレ、方針ヲ動カサ、ル様、御助援之程奉冀望候、一寸参堂之含

ニ御座候得共、多忙如是、草々、頓首

十二月十四日 枕流

桜洲老先生 乞内覽

一六、大山巖

1、「工部省 中井権大書記官殿 大山巖

親展

」

拜啓、陳ハ馬車之儀ニ付、容易ナラサル御配慮ニ成上、深ク御礼申上
候、一昨日ハ諸所乗試ミ致候処、別ニ悪敷所も無之候付、今日日中ニ
軍馬局へ引取置具候様、同局之者へ頼遣シ置候間、相請取次第五百円
丈持せ、直ニ物産会社差出候様可致、旁御面働ヲ掛ケ申候、いづれ委
曲ハ、得拝顔候上可奉謝候也、頓首

二月一日 大山

中井老台

2、今夜ハ食事參候様、工部卿よりノ書面落手いたし候、昨日ハ他行中
ニ而返答不致、宜敷御演説可被下候、何も差支無御座候間、必ス参館
可仕候、通常礼服相用候而宜敷御座候や、御尋申上候也、頓首

廿三日 大山拝

中井様

3、「京都府中井知事家族 広島天神町明暉楼 大山巖

親展

」

拜啓、然者、正三位中井弘殿御病氣発在候処、御療養無其効、遂ニ御
遠逝被召仕候、御愁傷之至奉存候、乍輕微、香花料金拾円御贈申上候
間、御靈前ニ御備被下度、此段得貴意候、拝具

十月十三日 大山巖

亡中井弘殿御家族御中

4、御壮業被成御座候条、奉敬賀候、さて、明十八日何の設けも無之候

得共、松方、鮫島等之諸侯相招キ置候間、老兄、若御閑暇ニ被為在候
得者、夕六時ヨリ御來車被下度奉願候也

一月十七日 大山拝

中井老兄 玉榻下

二伸、御差支之有無、乍御手数、一筆可被下候

5、昨日者難有奉多謝候、陳者、今夜ハ大久保先生初メ諸先生ヲ拙宅江
招待いたし付、老兄御障なくハ、六字前後ヨリ御來臨被成降度、希望
此事ニ御座候、稽首、拜具

八日 大山巖

中井老兄 玉榻下

三伸、御來車之有無、御一答奉願候

6、「中井老台 大山押上

拜復

過刻ハ失敬申上候、さて、來ル六日午後六時半比ヨリ御光來被下度、
尤、別ニ渡辺氏へハ不申遣候間、老台より可然御通可被下候也 頓首

七月一日 巖

中井老台 玉榻下

7、來ル十日、山県卿ヲ相招キ置候間、御差支無御座候ハ、夕景七時
御光來被下度、尤、御隨意之御服ニ而、御出被下度、此段、以寸楮奉
希望候也、敬具

八月七日 巖

中井老台

二伸、屏風張付ハ御免

一七、大井憲太郎

1、「小島忠里様 大井憲太郎

拝答

拝読、別紙証書へ記名捺印差出候間、御落手可被下候、小子ハ当市へ
寄留届も致シ居不申候間、印鑑証明者、区役所ニテ出来不致候ニ付、
其辺御含可被下候、右、拜答マテ、草々、頓首

十一月廿四日 大井

小島様 侍史

一八、大木喬任

1、明十九日、小生西ノ久保別荘へ御退省より御光駕相成度、御約束致
置候処、清国公使饗応有之候間、明日正午、延遠館へ罷出候間、何と
そ明日午後二時半よりの光駕被下度奉願候、過刻、土方よりも如何欤
ト問合セ有之ニ付、同様申返し被下度候、此段、為可得貴意、勿々如
此御座候、頓首

一月十八日 大木喬任

中井書記官殿

一九、大谷清

1、「中井滋賀県知事殿 内務省 大谷清

要密必 親展

拜啓、陳ハ今般機密金三千円、貴下へ可及御交付旨、被命候付、別封
第一国立銀行為替券老葉送致候間、御查收之上、御領受之証御送付被
下度候、此段、得御内意候、敬具

明治二十二年十一月廿六日

内務省会計局長 大谷清

滋賀県知事 中井弘毅

二〇、尾崎行雄

1、「築地二丁目二番地 中井弘様 東京市駿河台鈴木町貳番地

貴答 尾崎行雄

拝復、其内御邪間可仕候、拙著偉勲者 既に品切れに相成候へ共、幸ひ
前篇だけ者、手本に残本有之候間、拝呈仕候、後篇ハ入手困難と存候、
草々、不尽、行雄

二十三日

中井老台

二一、川村純義

1、御安康奉賀候、然ハ、今日御約束之通九鬼方迄、御同行可致候様、
尚、退省より二字過、精養軒^二而御待合可致候、同所江同時比、御出
被成間敷や、勝負も少々いたし度候、伊集院達志^江も申通置可申候、

五月十九日 純義

弘君

2、御清福奉賀候、然ハ、ライ□^九号之儀、早速□^輔江御談合被下候旨、
懇々御書面被下、重々御手数之至奉万謝候、風帆船者、如何様共御用
立候得者、貴省之御都合^二任セ可申候間、左様御承知奉願候、明日ハ、
吉井翁宅へ被招候間、其節万可承候、先、御回答迄、如此御座候也

十月廿四日 純義

中井君

3、御回答之趣、拝承仕候、種々御手数之至、万可然様奉願候、屋久島
二白、明日ハ横浜へ罷越可申候間、貴宅江ハ、得罷出不申候、

板之儀、御安き御用^二御座候間、取^二御遣可被下候、尤壹枚四、五部

之板三枚位^二相成申候、幅ハ壹尺位^二有之、御用立候得ハ、仕合之至
存候、拙者、腫物も追々快方、両三日中より出勤も可仕候心得御座候、

尚、御閑静之節ハ、御遊^二御出被下度、昨今之暑氣ハ、頗ル烈敷候

間、折角無御痛様、専要奉存候、拙者庭前山林ハ随分涼氣を覚候間、

御出御凌ぎ被下候ハ、是又多幸存候、此より貴答迄、草々、如此御
座候也

七月卅一日 純義

中井君

4、「工部省 中井書記官殿 川村純義

急 親展

尚々、十二字迄ハ大政官^二而御答書相待申候得共、何之御答も無之
定^而御差支と被察申候、何とぞ御用捨可被下候、

過刻ハ三田製作所拝見之儀願上越候得共、少々差支到来候間、今日ハ

御見合被下、後日^二御都合奉願候、余ハ、拝眉之節可申上候、敬具

十一月五日 純義

弘君

5、「中井様 川村拝

拝答

尊書致拝承候、度々御手数成上候次第、恐縮千万此事なり、先方定^而
秘蔵可致候と被存、先達^而頃ハ、代価次第^二者 手放候様子御座候得共、
時節到来^二付、同人も難手放カルヘシと被察候間、何とぞ余計之御面
働不被成下候様奉願候、昨夕、大山氏へ純義婚礼一条も相咄置候、昨

朝、益田氏入来、委細承候得共、大山如何と被存、右、婚礼式之儀も相通シ置候、委細ハ、拝眉之上ならで者難尽候、先ハ、御答礼迄、如此御座候也

十月十七日 純義

弘老兄 玉机下

二白、保養丈之事^二者、横浜より子犬貰置候間、是より閑暇を以練習為致可申候し積^二御座候間、返ス^一も御手数を煩上候段^者、御断申上候、万一、手放候節ハ、御通報丈を奉願候、何も拝顔万謝可申上候、 純義

二二、河瀬真孝

1、「築地三丁目十五番地^二而 中井弘藏様 河瀬真孝

親展

拝誦、新禧万賀、先以御清安奉賀候、御示中尊館罷出候ハ、新聞紙外之新聞御咄聞可被下、如何^二も争所相変^二も御懇情之依旧、感佩之至、早速拝趨仕度奉存候得共、御承知之通野生今日之身上、自然公交^二も憚心不許所有之、更^二他町之往来之謝絶罷在、無扨御無音申上候、近日、榎木氏より之来書中、野生身上之儀、賢兄より承知之由承り、且同氏も為^二幾分之形况了解仕候様子、是亦御懇到之所致、感銘之至^二奉存候、野生近頃頗^二鳩追^二多忙、両日来之他出、昨夜、田中宅尊翰落手、為^二拝復遅延^二及候、銃獵御好も候ハ、御供仕度候、右、後怠之拝謝旁、寸楮如之御座候、敬具

一月十三日 真孝百拝

中井弘藏様

2、「工部省^二而 中井弘藏様

拝復

朶雲雖有拝誦之処、来ル八日前後御来駕被成下へく^二付、日時撰定之上、御回答可申様との高示承知仕候、即、来七日後四字比、高臨辱ふせハ幸甚、尤、鄙失後、即今当辺在地中、別荘小屋^二家居罷在、別し^而遠方高趾之煩勞を憚り入候、此段^者、前以御断仕置候、頓首

七月一二日 河瀬真孝拝

二陳、早速高示^二相答可仕之処、鄙弟此両日、横須賀より帰宅、今朝之接手、為^二遅^二相成候段、是又御用捨可被下候、以上

中井老兄 梧下

3、「東京工部本省^二而 中井弘藏様 河瀬真孝

急キ

前略、明七日午後四字鄙屋江御都合次第御来車被下度段、得御意置候処、同日、森有礼氏より小石川之水戸邸へ納涼之小集へ来会之誘引を得、定^而賢兄も右へ御会合之儀^二者可有之候得共、万々一、未だ御承知無之儀^二も候ハ、御繰合を以て同所へ御出懸ケ^二而ハ如何、兎^二角、生ハ右誘引^二応し候之覚悟^二御座候故、此段、為念御断致置度、如斯候也、

七月六日 河瀬真孝

中井弘藏様

二二、海江田信義

1、かへす^一時下御自愛、御故なきよふ早々御帰京奉待上候也

雲翰拝見、益御安康被成御座、奉敬賀候、然ハ、御新築御立派成、然テ皇

国風の晩食可被下^二付、参上可仕トノ御事、千万難有御懇情奉感謝候、然処、遠近の山時鳥このころは、あり家さためす夜た、鳴らん 時鳥連中^江先約いたし置候故、御意^二応かね、残念此事^二御座候、将明日御出宿、御生国御廻回之よし、時下御自愛御無事御帰京奉待上候、^書井、税所二翁へ可然御伝声奉頼候也

七月十一日 海江田信義

中井大兄

二四、加藤

1、「中井先生 加藤

至急

拝見、御無音罷過候、青説今日参事院より中山寛六郎ヲ誘テ、只今帰宅仕候、これより一杯試ミ度、且住人も已^二注文セリ、願クハ御来覽被下度如何^レ、至急^レ、御挙趾^レ、匆々、

十八日 加藤

中井老台

二五、樺山資紀

1、「貴族院議員 中井弘殿 樺山海軍大臣

至急

拝啓、御多祥奉大慶候、陳ハ、御緩談中度考も御座候間、本日午後四時過より芝公園地内紅葉館^江御光来被下度奉希候、外貴族院議員該員ハ、御招待仕置申候間、何卒、御差練御来臨^二希上度、乍遅廻、比旨、匆々、得貴意候、拝具

十一月廿四日 高島綱之助、樺山資紀、松方正義

中井弘殿

二六、川田剛

1、「京都府 中井知事殿 東京牛込若宮町 川田剛

親展

書敬呈仕候、然^者頃日新聞紙上に於^而、貴官御病氣之由承知、敬入候、其後如何御入候哉、追々御快方とは奉存候得共、不取敢、以書中御見舞申上候、為国家、折角御自玉奉祈候也、敬具

十月八日 川田剛

中井知事殿

二七、木戸孝允

1、「中井弘藏様 木戸孝允」

乱筆高恕、乍病骨も頻^二老兄方之消日御^レ申候

尔後弥御清適奉賀候、先達^而ハ度々朵雲御投与奉謝候、さてハ、本邦去月之紛紜、定^而外務より御承知、隔絶之地、上野公使始御疑案も有之候事と存申候、可慨歎ハ、本邦人未一定之識見甚乏敷、或ハ封県、或ハ守旧、或ハ民権、其中氷炭之性質相異なるものも有、時^而ハ田舎同様之次第為、前途杞憂之至^二御座候、何党^二も国家之平安を深大^二存ハ、至極^二御座候得共、確乎たる目的無之、一時不平之為めに世論を煽動之様^二而、変移無窮ものハ、都^而国勢を逆歩し、不幸無此上と存候、弟も九月来固疾再発之気味有之、甚難儀長久も無覚束と奉存候得共、去月ハ甚不安相考之辺も有之、推^而出勤も仕居候、析柄、於朝鮮ハ、香華湾^二軍艦へ発砲、是又先年来之行か、りも有之、不問^二措之訳^二も到り兼、政府上^二おいても至当之所致無之^而、悠久之策も

有之間數様被相窺申候、定而御知友より遂皆御承知之事と奉存候、何とも乍序大略申上候、上野公使へも可然御致意御頼申候、其中時下御自愛第一^二奉存候、草々、頓首

十一月十八日 松菊

桜洲老兄 御中

尚々、横山も定^二而無事^二可有之と存候、于時老兄之至^二而御引立被成候人^二と歎申事^二而、薩人海老原某、是所^二江^二當時不平徒之魁^二而、頻^二新聞^二など^二而^二煽動候^二而、不知之頭腦を惑乱候と歎申評判御座候、御帰郷之人^二ハ賤み候^二而も兎角薩人と申と、世間^二而^二ハ随分かわれし気味有之申候

二八、黒田清隆

1、「築地壹丁目二番地 吉田吉二郎方 中井滋賀県知事殿 黒田清隆

至急

尚々海軍大臣ヨリノ書面封入イタシ候、御一覽ノ上御返却可被下候
拜啓、先刻西郷海軍大臣ヨリ書面到来、今朝内務大臣へも示談被致之
由候処、未タ十分之結局^二至兼、又総理大臣へハ度々被参候得共、不
在^二ニテ^二面晤ヲ得ス、只今在宿之旨、報知^二来リシニヨリ、是ヨリ罷越
ストノ旨^二有之、段々尽力相成候趣^二御座候間、御含迄申上置候、頓
首

二月廿七日 清隆

中井知事殿 安田知事殿

追啓、西郷大臣斯克親切奔走致シ呉ラレ候^二付^二ハ、安田君^二ハ右
御挨拶被下置候方、可然歎ト奉存候

2、「中井滋賀県知事殿 黒田清隆

親展

拜啓、過日来段々御厚配相懸、陳謝致候、殊^二御紙面被下敬承、為邦
家慶賀此事^二候、猶、此上共可然御尽力相願度、御挨拶迄、早々、如
此御座候、頓首

二月廿九日 黒田清隆

中井滋賀県知事殿

3、拜啓、此之内より非常之御高配被下、万謝申上候、尔後之所如何之
都合^二御座候哉、又、今朝者 弥大藏大臣へ海軍大臣御一緒^二御出被下
候哉、併^二相伺候、猶乍此上、御依頼仕候、此旨、草々奉得貴意候、
敬具 二月廿九日 清隆

弘大人 座右

4、「築地二丁目十五番地 中井弘様 黒田清隆」

愚妻儀、久々病氣之処、養生不相叶、今廿八日午前八時死去致候間、
此段為御知仕候也

三月廿八日 黒田清隆

追テ来ル三十日午後一時出棺、青山墓地へ埋葬致候、以上
5、拜啓、時下御清適奉賀候、御滞京中^者、毎々失敬、御海容相成度、
扱、此度御遠路被懸貴意、御地産髓、態々御送与相成、昨日到達、直
^二調理^二拜味、且近隣等へも分配仕候、御芳志拝謝之至^二候、御礼芳、
御答如此^二候、早々、頓首

四月八日 黒田清隆

中井弘様

6、「中井君閣下 黒田拝

貴酬ヲ乞フ

拝啓、来ル十日午後二字過より愚妻里本庄五ツ目十五番地之様、御来車被下度旨、而親共より願出申候間、於御閑静ニテハ、閣下御令闈様偏ニ生よりも奉懇禱候、此旨否、貴酬伺度、匆々、拝具

五月六日 黒田

中井君 座下

7、「中井知事殿 黒田清隆

至急親展

愈御清適奉賀候、儲、緩々高話拝承仕度候間、明一日午後五時比ヨリ拙宅へ御来車被下度奉願候、草々、不具

九月三十日 黒田清隆

中井滋賀県知事殿

追而御差支有無、御一報奉希候、

8、「中井君 黒田」

拝啓、扱テハ、先日者推仕、乍毎、御失敬御海容可被下候、○、ナホレヲン額一切ノ代価百円余ノ御通知拝承、一寸ト一口御茶漬用バ、テモノ資ト見込、拾円更ニ差上候間、御落手可被下候、○、ラツコ皮之御用被仰聞候得共、姿今ト殊死血戦ニ不可欠品ニ付、乍御氣之毒、御断申上候、然ル処胤末之熊皮ニ御座候得共、弊邑ノ産トシテ呈候間、御笑留可被下候、右者要用のミ、早々、拝酬

十月廿五日 黒田

中井様

二二伸、乍御手数、金円ノ証文念ノ為メ被下度、是又願上候、以上

9、「中井賢台下

奉復

拝啓、何より之好物、乍御意御投被下、難有拝受、早速風味可仕、久々振ニ生茶之名物調味、式八之春を向フル心持ト御一笑可被下候、此旨、拝書万謝可申上候、匆々、敬具

十二月廿日 清隆

弘賢台下

二伸、又々御持病ニ御煩れ候旨、朶雲ニテ承知、折角、時分柄御保養專一ニ是禱候也

10、「中井弘賢台下

粗品添

拝啓、追々極月切迫ニ相成、新年之楽ミ弥増し候んと、纔両日を三秋之如く待兼可申候、然者、貴台下御持病如何被為在候哉、定而御全快奉南山候、扱テ近比、粗末ニ御座候得共、麦酒、鮭御歳暮之印迄ニ進呈候間、御笑留可被下候、此旨、匆々、敬具

十二月廿九日 黒田拝

中井老台下

二伸、時分柄、折角御保養專一ニ奉禱候、此ノ狂詩ハ既ニ十四年も過き偶成セシニ付、御一笑可被下候也

国歩艱難十四年 満期桂冠酒家仙 生憎万花今将発 風雨吹散北海天 歳晚有感

二九、黒田清綱

1、「工部大書記官 中井弘殿 黒田清綱

親展

過日御依頼申上置候忠明正隆と申者、皇城建築掛願之儀、平岡氏へ御申込被下候哉、依時宜者、先方へ本人差出し度候間、何卒御都合向御知らせ被下度、此旨乍略儀、書中御尋申上候也、頓首

一月十八日 清綱

中井君 几下

2、「中井弘殿 黒田清綱

要用親展

打絶御不沙汰、失敬奉存候、陳ハ、別紙名前之者、今般工部省ニ於而守警御召募相成候由承得、先生へ懇願致呉候様、無余儀被相頼、同人ハ小生必ス世話不致候而、不叶者候間、何卒御採用被下候御都合被成下候儀、相調ましく哉、相成事候ハ、御周旋被下度、偏ニ奉拝願候、尤、当人差上候間、御逢被遣被下候ハ、猶更難有奉存候、何れ近日昇堂可奉多謝候へ共、其内、乍早略、書中御依頼申上候也、頓首

八月六日 清綱

中井先生

兵庫県平民、伊勢松太郎、当年廿二、右、一昨年来東京府土木課備相勤居、今般減額ニ付、解備相成候事

3、「工部省 中井大書記官殿 黒田清綱」

昨日ハ、御来客央大ニ御邪魔仕候、扱、本日ハ予而申上置候通、橋口へ離盃旁洋食之晚餐振敷度、椀山、千田へも申入置候間、何卒午後三時より四時迄之間ニ、御来車被下度、此旨、猶為念、御支之有無相伺度、早々如此候也、頓首

五月廿八日 清綱

中井賢台

三〇、楠木正隆

1、当夜、付属舍墺国公使之為、暫時御借用候事承知、併倍子等之設も無之候間、右等ハ貴方ニ而、御周旋可有之儀ニ相心得申度、余ハ拝容ニ相残、御答まで、如此申上候 頓首

九月十三日 隆

中井先生

2、来四日、於延遠館、洋行之三氏へ御送別会有之ニ付、劣生ニも御会同候様、御懇志之段、不堪感謝候、然処、同日外国人先約有之候、乍遺憾欠席仕候間、不悪御領承懇請申候、右拝答まで、如此御座候也

廿九日 正隆

中井弘君 閣下

三一、後藤象二郎

1、「中井様 後藤」

昨日も不得拜趨、遺憾ニ不堪候、今日者、御沙汰相待拜趨可仕処如何、小生、過日来之風氣、于今不知尽、今朝復頭痛強く、平臥罷在候、甚申上兼候得共、御他出之御序手ニハ、枉願も被下候ハ、難有奉存候、此旨御理儀、草々、如此御座候也

十月十二日 象

桜洲老台

2、「中井殿 後藤生」

肅啓、今夕参上之旨、昨日粗申上置候処、小生義、昨夜来脚氣ニ被当、

朝来平臥候て、今夕ハ何分登門難相成、乍殘懷、御理申上候、一兩日中
必參上、万可相窺、此品頗不佳もの^二御座候得共、呈府下候、御笑留被
下候ハ、辱奉存候、書余皆期御面晤、匆々、拝具

七月七日 象

桜洲老兄 梧右

3、「中井弘殿 後藤象二郎

拝復」

拝啓、昨日^者不敬^レ、^者、明廿八日參上之様御案内被下、辱次第
^二奉存候、則、如命、正權召連參上可仕と奉存候、陸奥も今朝面会候
故、案内之旨申通候処、同人も欣然參上之趣^二御座候、霞余夫人^者、
自只今申遣、誘引之心付^二御座候、先^者、右拝答まで、余^者拝肩御礼
可申上候、草々、頓首

三月廿八日 後象敬白

桜洲賢兄 一函丈

4、尔来益御清適之筈、欣然之至奉存候、然則、兼て御配慮被下候、彼
之氣[□]一条、過日、彼之会社々長態と出崎、種々談判之末、新^二
定約致候、委細大臣政^二申遣置候故、必同人よりも可申上と奉存候、
実^二是迄、種々御配慮被成下候段、御礼筆紙^二難申尽奉存候、何卒可
然、先々^者、可然御内通奉願度、此度ハ種々奉申上度候処、已^二先
船出帆^二差迫不能一々不取敢、此書面奉呈仕候、恐々欠敬、不一

四月六日 象 拝具

桜洲盟台

5、「中井弘殿 御手収 後藤象二郎

五月八日

一昨日^者、尚又御書面被投被仰越候儀承知、依てハ明日^者、弥誰々御
同伴^二可有御座哉、少々心積も有之候故、尚委細、御示奉願度、其中
若も多人數^二御座候ハ、半明日、半近日^二相成候方、亦妙手と被存
候、尚、御考慮奉願候、先^者、右相窺度、草々、頓首

五月八日 日華

桜洲老賢兄 台下

6、「中井弘殿 後藤象二郎

親展 拝復」

御投書拝見、被仰越之旨承知仕候、明日^者、日曜休暇日故、出省^者不
仕、自朝二時頃迄^者、来人之兼約有之、对客之筈^二御座候得共、自然
御差急之儀も有之、其時間^二御光臨も被下候ハ、繰合御高話拝承可
仕候、尤、二時半頃よりハ兼約有之、他出不致てハ不相成候間、此旨
御承知、宜奉願候、草々、頓首

十月十一日夜 迂象 拝復

桜洲賢台 照

7、拝披、昨夜^者、万不適失敬仕候、被仰越紀州密柑^者、一箱進呈可
仕、御旅宿へ差上置可申候、或^者、松楼^二て之御入用なれば、松楼迄
為持差上可申候哉、御望次第被仰越度、御沙汰無ければ、御留守へ
上置候、先生永釈無^者、屹度御待合申上候、今夕^者、都合次第、午後
^二罷出不申歟も難計、子細、成程遠方之趣故、夜^二人候得^者、最早罷
出不申候、先^者御答迄、草々、拝

十二月一日

小松先生へ者、弟之心事篤と御語置被下度、何分、如此間違候而者、不安候、恐々

桜洲兄 座下 雲濤生

拝復

8、「中井弘殿 侍史 後藤象二郎

拝復」

難有拜読、愈十三日^二者 御供、其上、先生御同伴、御光臨被下候旨、御示被下承知、欣然拝適仕候、懸水高遊之風景御示被下、真^二濃艶滴月之春色、想像仕候、小生も岐阜一件^二取紛、未果一遊、近日御同携相試度奉存候、庭前之桜花も已^二発開候得共、未新栽之種揃不足、直以春色、当十三日御一觀可奉願候、先^者、右、拝答^耳、書余、皆期拝眉候、草々、頓首

十一日 日華

桜洲老賢兄 御手収

9、「工部省^{ニテ} 中井弘様 後藤象二郎

親展

今朝者、御邪魔仕候、然^者、其節御頼^{一条者}如何も可有御座候哉、御一筆御回答相願度、如此御座候也

一月廿八日 象 拝具

桜洲老台

10、「中井様 後藤

品物再行」

拝啓、此品頃日自京師取寄候、近日橋下納涼之御央、右^二御用も哉と

拝呈、御咲留も被下候ハ、本懐之至^二候、象、拝具

桜洲盟兄

五月二十五日

11、御清安御帰宅之筈、欣然之至^二奉存候、扱、今日^者、御同伴相願候様、昨日、呈書仕置候処、今日^者、日比谷線練場之供奉、御断方願候故、一日往来差扣申候、就てハ明日^者、参館仕候故、退省刻より御同伴相願申度、此段、御相談旁、此書呈上仕候、将右築地邸地ハ、何之処^ニも可有御座候哉、此凶差出候故、乍御面働、一点御記奉願候、頗至急^二家作仕度故、則今日為試運[□]仕候故^ニ、有此願候也、草々、恐恭、不一 十月廿一日 後藤象二郎

中井先生 研北

12、「桜雲山房様 皆覽主人

御手収 五月十日 唐墨ミ志挺再行」

尊墨難有拜読、昨夜ハ懇と御光臨相願、却て不敬^耳恐縮仕候、御蔭^ニて、久活之故人^ニ相接、実^ニ欣喜此事^ニ御座候、然^者、御心付^{ニテ}折出某御差越被下、辱奉存候、逐々新居裝飾^ニも取懸候ハ、必所用私私いたし候と奉存候、拙筆揮毫、是^者承知、四五日中両三紙塗鴉供御一案可試候、唐墨ミ志挺差出試候、極上品と云^{ニ者}非候得共、尋常売物^ニ比すれば、錚々^者御座候、御遣用^ニも相成候ハ、本懐也、先^者、右、拝答^耳、他ハ近日拜趨、万可申談候、草々、頓首

五月十日 日華

桜洲老盟台 函丈

三二、五代友厚

1、拜呈、陳八坂地御出立之節、一刻御暇乞旁罷出見候処、既^二御出立跡^二而、拜謁不仕、當時折悪、商社会議^二而、御見送も不申上、背本意候、尔後渠事も弥御引受、相濟候事と想像仕候、布説今日拜書、琉球豚脚注文相成候処、迂生方^二而も、過日來入用^二而、坂地承合候得共、一向在合無之、松方様參候節ハ、其実、川崎方へ一壺參居候を、皆々貰受、用弁仕次第、自然三十日松方子被參候由^二付、其辺の御用意歟と想像罷在候得共、右之次第^二付、愈御承引可被下候、迂生^二も是非大藏卿随行仕度存候処、用向有之、此度ハ得罷出不申、何れ不日罷出、万緒御咄申承度、乍末毫、奥様^二者、何時も拙宅^二江向御出掛相成候様、御通信可被下候、併我日御出立^二相究候ハ、御洩被下度、此旨御断劣、奉報候、頓首

七月廿八日 松陰生

桜洲先生 侍史

2、御申出之条^者、未麓品^二候得共、珍敷を以可賞、式袋進呈仕候、御笑留奉願候、恐々、頓首

四月廿六日 松陰

桜洲先生 侍史

三三、兎玉源太郎

1、拜復仕候、来ル廿五日御招待被下、難有奉存候、同時刻参上可仕候右御請迄、謹言

三月廿四日 源太郎

侯爵山県閣下 侍史下

三四、税所篤

1、「工部省 中井大書記官殿 税所篤」

過日^者罷出候所、生憎御留守、不得拜晤候、陳^者、茶 差上可申候、遽^二成候哉、若、不出来候へハ、甚困入申候、何卒專^二御斡旋奉頼候、今未明より參催促迷惑仕候故、一応御覧申候、頓首

廿六日 篤

2、「京都荒神口 中井弘殿 堺茅海樓 税所篤

親展 八月十六日 托大久保殿」

炎熱未磷候得共、益御壯健奉賀候、陳^者、今般大久保利和漫遊いたし承候得^者、未角腕持之由、篤一より承候へハ、京都花族之内^二ハ有之ましくやと申、同志中^二て心配致居候由^二、愈於御地御探索被下(極内密、要至意)可相成ハ、今般見合為致候場合^二相成候へハ、誠^二大幸之事^二存申候、急々出京御談合申上度候得共、奈良之方余り長行候而も不宜候付、御熟知奉願候、右迄、匆匆、奉得貴意候也

八月十六日夕

樓洲先生 机下

3、「中井先生 税所拝」

昨日^者御馳走且御高説滌耳候、篤も此頃弥耳聾^二込入申候、高木ト云人ハ、洋術家連^二ても治療^二当候人之由、願クハ居所為御知、且御一書御投呈候ハ、明日^二も受診^二參度候、御願迄、頓首

十月念六

4、「東京築地二丁目 中井工部大書記官様 泉州堺市村 税所篤

午二月十三日

「書肅啓、余寒陰霽、不定之氣候、高堂益御壯盛欣賀、弊夫右以安

然、金剛山之微雪牆外之曝布点々、現在極楽世界、発足之節ハ例之御不沙汰、甚不本意御高容可被下候、刀剣探索も術計尽候、又良物も無之候、○内海長崎縣令より、過年来、内意転勤之事、井上、山田両氏へ内報いたし置候由、何卒御尽力被下度、同人ハ兵庫県成ニ不御遣、遊憩致来、病身ニ不堪様子ニ見受申候、帰東之上相願置候処、即今立願御中ニ而此機会ヲ失候而者、際限も無之様子ニ相聞申候、何分賢策之程偏ニ奉希候、○又先般（伊藤氏へ付属ノ人ナリ）工部大書記官（何某安村トカ忘タリ）へ五代より相願候由、津枝正信ト云人（元奈良県参事也）志願之儀、帰村度毎ニ被参、五月蠅候、全体五代手ニ付テ居たりし人也、貴君へ相願くれ候様被為願候、御同席某氏迄御示談專一奉願候、三月微暖を催候ハ、上京可仕、京撰間御用事も候者、被申聞可有之候、右御願迄、草々、頓首拝

二月十六日

中井桜山盟台

5、「築地二丁目十番地 中井弘殿 二本榎西町 税所篤」

昨日、川崎へ参候処、病氣不得面晤候、男悴ハ談候而主人へ申入候処当月中も致候へハ、直咄しも可致ニ付、夫迄相待候様と之事也、当春頃、拙者留守中、三井より川崎へ依頼、万事附託いたし候由ニて、売買値段等之儀者、三井関係可有之候へ共、人ニ譲渡ニ付而者、地主之自由ニも不参様ニ察申候、右、形行迄申上候、いつれ外ニ求ル方可然と存申候、段々御面働恐縮、万安拝晤候、篤 頓首

五月廿八日

桜洲老台

無論不謹被申事ニて無之候、近頃附托を受、寸益も無之付、遺憾ニも可有之歟と想像耳

6、「中井様 税所篤」

小松家旅享御見立被下候ハ、乍御面働、直ニ御一封被下度、町田も今日より発足、狸之出そふな所ニ来申候由、今日中ニハ可相分旨、昨朝申置候、右、御願迄、匆々、頓首

五月十日 篤

中井老兄

7、「中井先雄 税所篤」

拝酬

昨日、御安着欣賞、早速御来賀被下由候処、折節不在、遺憾ニ存候、明夕云々拝承、過刻仙堂様へ明夕ハ可行ト、松方侯へ行合、是ハ期シタル歟之事ニも無之旨、上々ヲ貴老力待迎ニ□し、同所へ御出会候而ハ如何、何分明朝斑老へ伝詞可申上候、匆々、

十五日

逐而早速可相伺候処、累々事ニ付、昨今人ヲ待テ来ラズ、又貴老も御多忙ト存申候、俯仰日をくらし候、

8、「中井老賢」 税所篤

昨日之掛軸ハ、多分勝翁收手歟と存申候、今朝百円ヲ限ルト申遣置候、先者、若御懇望ナレハ買置候而、周旋可致也

夜前ハ御旅行、今日者御不在、続て参ル様之事ニ非ス、芝山内、本田之前、東京府之地所拝借之事也、是より上之地、外ニあらず、是非借不出来候ハ、仙台坂ノ下、種子島正八郎の居た所、三井持を安クテ

猶よし、少し高クテモよし、年府^ニして買受之事、両様之間御尽力奉願候、恐惶頓首

五月廿六日 篤
桜洲老台

三五、佐々木高行

1、「中井弘殿 佐々木高行

七月八日

拝呈、益御清榮奉賀候、陳^者、来十一日、田辺高知県令相招き置候^ニ付、何之風情ハ無御座候へ共、御閑暇^ニ候へハ、同日午後四時より御貴臨被下度、此段及御案内候、頓首

七月八日 佐々木高行

中井弘殿

追^而御来車之有無、十日迄^ニ御手数相煩候

2、「中井弘殿 佐々木高行

親展 二月二十日

前略、陳^者、大坂商船会社之儀^ニ付、大体之引合ハ宜敷候得共、聊か更^ニ取届置候筈^ニ相成候間、塚原等へ御打合被下度候、尚委詳ハ、後刻十一時半頃工部省へ出掛候間、其節^ニ相談可仕候、先ハ草々、頓首

二月廿日 高行

中井老台

3、「中井弘殿 佐々木高行

親展 至急 四月八日

謹啓仕候、髹陶敷処、益御安康被為在、奉賀候、明日より上方^江御出

之趣、嚙々御用案被為在候半、奉察候、昨夕益田へ御洩之儀、早速可差遣^者処、同人^者過日来病氣引籠居候間、往復^ニ而及遅延、只今差遣申候間、御收手可被下候、余^者、拝謁^ニ申残候、恐惶頓首

四月八日正朝

築地様 貴下

4、「京都府 京都府知事 中井弘殿 東京高輪御殿内 佐々木高行

御見舞

拝啓、陳ハ過日来御病氣之御趣、新聞紙上にて承知、驚入申候、如何様之御容体^ニ御座候哉、御案し申上候、不順之時節柄、十二分の御療養奉折候、以書中、茲に御見舞申上候、敬具

十月八日 佐々木高行

中井老台 床下

5、前略、陳ハ本日之御評議中、先生之転任之義、随分論^モ有之、一度ハ六ヶ敷景況も有之候処、漸ク決定相成、乍併、工部省御用掛^{云々}者、何分山県辺之論^ニ而六ヶ敷、強^而申候時ハ、返^而不都合と存候間、乍遺憾、御消光之間、尚御考慮次第御手ヲ御附被下度候、将、鉦山一件ハ、工部卿之見込更^ニ申立候様、御指令相成候筈^ニ候、多分本日歟、若クハ明朝^ニハ指令可有之候間、其心組^ニ而見込申立候と存候、折柄明日ハ開業式故忙、明後日ナラデハ相届申間敷と存候、上村之事も佐藤サエ決定致候ハ、早速相運候筈^ニ致置候、佐藤ハ元老ノ心組候伊藤、山県ハ異存も無之候得共、井上之処如何哉と存候、大臣公之御考^ニ而、井上^江ハ、大臣公ヨリ御相談之筈御座候、先ハ右斗、頓首

六月廿四日 高行

中井老台 御一覽後御丙丁

三六、鮫島尚信

1、「中井書記官殿 鮫島尚信

親展

貴書拝読、陳ハ前田、帰京之話、縷々御示被下、拝承仕候、今夕ハ、森来訪之約束ニ付、御用閑ナレハ、六時比より弊舎へ御来話被下度、将又、御嘱托之一書ハ、未夕卿も一覽不致候得共、御急きゆへ差進候間、明日迄ニ小生へ御返却被降度候、右、拝復迄、早々、頓首

六月二日 尚信

中井賢台

2、「英国論屯府日本公使館 中井弘様 米国□□府日本公使館

吉田清成

尔後愈御清穆、奉拝賀候、陳者、小生ニも其後逐日快方、弥今日無異当港開帆帰県仕候、乍憚、御降神被下度、尤、全快次第再航之胸算ニ罷在候間、不遠欧地ニて得拝肩度候へ共、其内時下折角御愛護奉專折候、書者忙際御暇乞迄、乱毫、草々、不宣

十二月廿日 鮫島拜

中井兄

追而大久保殿江之御届物にて、慥ニ相届申候間、御安心被下度、珍事も有之筈候、御洩被下度奉願候、

3、「中井弘殿 鮫島尚信

奉復

拝読、然者過日拝借仕候馬車之義ニ付、縷々御示諭被下、御懇情之程、

奉深謝候、然処、右修繕も不日出来候筈ニ付、其内別ニ相願ニも不及

候間、左様御承知可被下候、報告書者、外務省江有之候ニ付、明日差出可申、草々、拝復、十一月十五日

4、拝読、陳本日者、四時後ニ者退省仕候間、五時半比より御枉駕被下度奉待候、草々、拝復

十二月八日 尚信

中井先生

二白、摺本之□者、其之分未達、今日相達仕処、差上可申候

三七、西郷従道

1、「中井弘殿 西郷従道

拝酬

尊書難有拜見、今午後二字過より参昇可仕候、草々、貴復、即刻

2、「中井弘殿 西郷従道

上書

鳥渡推参仕候処、いまた御帰宅無之付、残心之余リ一書残笠仕置候、来ル日曜日、目黒行之儀、又々少々差支出来、甚遅日不都合之至ニ御座候得共、来ル十二日午後より十三日両日之御遊行と御企被下度、其内い細拝話可仕候得共、不取敢、御断芳、早々如此御座候也

七月四日

中井大人 西郷従道

残書

3、御健康奉賀候、扱今夕御閑暇ニ被為居候ハ、御遊来被下度、近代之富士の牧獵等、久々振りニ御談仕度、依而如何得貴意候、書余拝讓

三月五日

弘大人閣下 従道拝

三八、佐野常民

1、拜呈、寒威凜烈之候、益御清健奉賀候、陳ハ、唐突之到ニ候得共、

今日ハ午餐差進度候間、十二時御光来被下度相願候、尤鮫島公使来車相成筈候付、渡辺氏江も申遣置候間、何卒御差線、御来車之程、呉々も奉希待候、草々、敬具

一月六日 佐野常民

中井盟台

三九、三条実美

1、「中井書記官殿 三条実美」

面談致度儀有之候間、明朝入来有之度候也

一月十三日 三条実美

中井弘殿

四〇、品川弥二郎

1、「佐藤工作局長殿 中井工部大書記官殿 品川農商務大輔

親展

謹読、長崎工作分局製造之小菅丸、共同運輸会社へ交付ニ付、頃日御

示談之末、代価拾七万円ト相定メ、御異存無之趣致了承候、夫々可相

運下存候、右、貴酬迄、得貴意候也

十六年四月六日 品川弥次郎

佐藤工作局長殿 中井工部大書記官殿

2、「中井大書記官殿 品川弥二郎

親展

尊書拝読仕候、御無異御帰京のよし伝承しつ、今以御無音計候、広瀬嘆願一件ハ、昨日ハ西郷、松方、佐々木ニも内談仕置候、兔ニ角ニ書面ヲ差出仕候ハてハ、不相運事存候、今日中ニハ管船局ニ於テ、右之上申書案相調候間、何卒、乍御苦勞、明日午後當省へ御出会被下候ハ、尚御密ニ御内談可申上候、先ハ如此也、頓首

十二日 や拝

中井様 侍史

3、「滋賀県 中井弘様 高くら西にしきのやより

御密披

ワザク御使を以て玉串五円御持セ被下、万謝々々、殉難士中ニハ、薩ノ幽霊も沢山有之、御案内も可仕之処、全クノ私祭、却テ失敬ト存じ不申上段、御推恕有之候、遺墨供覽中ニて、名高きものハ、西郷翁の御一新義拳の前夜之書翰ト歟、内務卿の三藩申合せの要目三ヶ条ノ自筆、久坂義助ノ天王山ノ陣中日記等也、○御違約恐入候得共、今夕ハ神戸ニ出て、明後日頃の船ニて帰京の積りなり、坂下納涼之事ナド御懇情、万謝々々、イツレ来月中ニハ共進会见物ニ出テくる筈ナリ、何も其節と、草々、頓首

八月卅日 や拝

中井老翁 侍史

殉難士への備物品ハ福びきニして、世話人其外へ遣し申候、一力のおても鯉節二本当り、君尾は御供物の鏡餅、御一笑可被下候、金錢ハ山崎宝寺へ堂宇維持金とシテ遣し申候、今日拝受仕候金員も宝寺へ相廻

し、御名前ヲ記シ置候間、御含ミ迄ニ申上置候、例ノよミテアリ、
遺墨展覽会ニテ、筆の跡みりや、涙が先きにたつや、身にしむ秋の
風

四一、白根専一

1、「中井賢兄」

拝啓、御来示之趣拝承、從昼參上仕度ト候得共、御都合も可有之ト
奉存候間、乍失敬、明朝八時頃御来光被下度奉希候、敬具

十一月廿日 専一

中井様 侍史

2、「京都市故中井知事殿方 本田親雄殿 原敬殿 東京本郷湯島

親展 白根専一」

拝啓、中井明府御病氣之処、御保不被為叶、遂ニ御薨去被成候段、嗚
御愁傷之至奉存候、乍些少、御花料差上候間、御靈前へ御供へ被下度
候、御悔申上候、敬具

明治廿七年九月十三日 白根専一

本田親雄殿 原敬殿 侍史

四二、重野安繹

1、「工部省 中井弘様 駿河台茂衣町一番地 重野安繹

親展

劇場陪観、眼福無窮、家小輩殊欣躍、千万感荷、謹呈寸翰、以奉謝、
他付面陳不具

明治十七年三月十日 重野安繹 頓首、再拝

桜洲賢台 梧下

四三、渋沢栄一

1、「中井京都府知事殿 渋沢栄一

侍史

尔来御疎情ニ打過候処、頃日新聞紙ニ台下御病氣之事記載有之、尚、
昨日、清水組原林之助より郵書報知も有之、始而其実を承知いたし驚
入候次第ニ御座候、定而充分之御治療御施しと奉存候得共、何卒此上
之御精養専一ニ奉祈候、遠隔之土地、直ニ拝候も仕兼候ニ付、不取敢、
書中御容体奉伺候、随而輕微之品ニ候得共、御見舞之驗迄、果物壹函
郵送仕候ニ付、御笑納可被下候、右、申上度如此御座候、匆々、不備

十月八日 渋沢栄一

中井知事台下 侍者

四四、末広重恭

1、「滋賀県庁にて 中井弘殿 東京銀座四丁目 朝野新聞

親展

末広重恭」

拝啓、本年も余日無く、追日寒氣甚敷候処、愈御清健被成御起居、敬
賀之至リニ奉存候、扱、生儀三四年來病氣にて、一時者、枯骨ト一般
なる有様ニ相成り、殆んど世事を放棄いたし候故、誠ニ申訳けも無之、
御無音仕り候段、万々御海容被成下度相願候、去日湖山翁より高心を
贈り越候故、兩日之紙上ニ掲載仕り候、右ニ葉、伏て左右ニ呈し候、
惟子今日、閣下ハ先の風流七三寸なる□の江州ニ在る時の如く、
所謂、中隱の妙あり、定めて御吟詠も多かるべしと想像仕り候、時々
金玉の計御投寄被成下候得者、紙上有光重々仕合之至リニ御座候、山河
遼遠左右ニ侍して、清談を聴くを得ざるを憾むるのみ、余者後信ニ讓

る、草々、頓首、再行

十二月廿四日 重恭

桜洲先生 侍史

四五、杉孫七郎

1、肅啓、陳ハ野村子爵儀、廿一日ヨリ少々頭痛相覚へ、眩暈ノ気味アリ、臥床服薬、二十二日、左腕關節ニ疼痛ノ覚へ、言語稍明瞭ニ欠クコトアリ、廿三日午前七時、自身ニテ煙草盆ヲ引寄セ喫煙シ、其ノ後下剤服用、八時過便通アリ、又嘔吐ヲ催し、頭痛甚敷、又悪寒ノ気味アリシカ、同十時ヨリ睡眠、十一時過二回ノ呻吟アリ、後チ昏睡ノ状態ニ陥リ、遂ニ廿四日午前二時十五分薨去致サレ候、誠ニ御全様痛嘆ノ至リニ存候、葬儀ハ来ル廿八日相営ミ候筈ニ有之候、薨去ノ通知及広告ニ友人トシテ閣下及井上、桂ノ両氏、小生ノ四人連名ノ事ニ取計度トノ事ニ御承知置奉願候、敬具

杉孫七郎

山県公爵閣下

四六、清一

1、「中井先生 白山拜

内密

遠方恐縮候へトモ、万亭へ御出被下度、万亭女郎虫貞く、又一歌御取

七候 六日 清一

中井公 侍書

四七、曾我部道夫

1、「京都市荒神橋畔 中井弘殿 東京ニ而 曾我部道夫」

拜啓、陳者 過般来御不勝之趣、昨今上京伝承致候、自今之御容体如何被為在候哉、素より差たる御事ニハ無之ト奉存候得共、時下季候不順之折柄、精々御撰養、国家多事之際、一日も早く御本復奉祈候、不取敢、御見舞迄、草々、敬具

十月八日 曾我部道夫

中井弘殿

四八、高島鞆之助

1、「中井弘様 高島拜

粗品相添

拜啓、連日之暑氣難凌御座候、然者、先日者 結構ナ御土産御惠投被成下、奉鳴謝候、未御礼も不罷出、失敬御海恕可被下候、此粗品、御帰京之御喜迄、進上候間、御笑納可被下候、頓首

七月廿七日 鞆之助

中井弘様

2、御閑暇なれハ、久々ふり御見会いたし度、夕剋より御光越被下ましくや、近辺之芋連相起置候間、い十院も御誘被下候ハ、仕合之至也 早々、以上

十一月九日 鞆之助

中井弘様 足下

四九、田中不二磨

1、「中井弘殿 田中不二磨

親展

来月四日午後六時、弊堂ニ於テ晚餐ヲ共ニスルノ歡ヲ得度、御惠願

平生之御着服^二被成下候て、多幸^二候、恭具

十月廿九日 不二麿

中井君

逐而、御惠顧之有無御一答ヲ煩候也

2、拜陳、来ル廿三日晚餐ヲ供シ、俱飲之榮ヲ辱シ度候間、此節柄御多

劇トハ拜察候へ共、若シ御繰合相成、午後四時弊屋へ御垂顧被降候ハ、満足之至^二候、尤、御貴臨之有無御一報ヲ乞ひ候也、敬具

三月十七日 田中不二麿

中井弘殿 台下

五〇、高崎正風

1、「京都上京荒神口 中井弘殿 高崎正風

直披

拜啓、御大患之趣、新聞紙上^二於而承知仕、甚以而喫驚仕候、昨今稍御快方^二被為赴候哉^二承及、少數安堵仕候へとも、尔後御容態如何被

為涉候哉、為国家実^二痛神之至^二不堪候、右早速御伺可申上筈之処、

去月末より広島へ出張仕居、帰京之途端、近親之不幸^二遭遇し、今日迄延引之段、不悪御海容可被下候、先者、右御伺迄、早々、頓首、不

備 十月八日 正風

中井盟台 侍史

五一、高崎親章

1、「京都市荒神口 中井弘殿 茨城県水戸市 高崎親章

執事御中

拜啓、御病氣御危篤之趣風聞有之、不取敢、昨日電報^二而御伺申上候

処、意外御大患之由実^二驚愕之至、何分御療養專^一奉存上、速^二御

快復之程、偏^二奉折候、不取敢、御見舞まで呈^一筆度、頓首

十月七日 高崎親章

中井様 執事御中

五二、伊達宗城

1、「四等議官 中井弘殿 宗城」

愈安寧雀躍之至候、陳^者、松根権六より一示之時及御依頼候処、周旋給候由、厚情之程忝存候、尚可然奉希望候、尤、過日寺崎氏^二も下官

より申入置候条、相談可給候様存候也

十二月十四日 宗城

中井殿

五三、田中光顕

1、「中井滋賀県知事殿 内閣 田中光顕

密事親展

御密展御覽後、御火中

近日御帰県之旨御多忙奉察候、扱ハ鉄道一件^二付、暫時得拜晤度候間明朝十時頃御出頭被成候儀ハ相叶申間布哉願継候、実ハ鉄道局より意見申^二及候^二付、総理へ不差出候以前^二一応御内覧^二供し申度奉存

候、万在拝書、不具

四月六日 光顕

中井老台 閣下

五四、谷干城

1、「中井桜洲先生 谷干城」

1、「中井桜洲先生 谷干城」

拝啓、明十四日円山俵屋支店に於て、谷、小野、江馬、宇田、伊藤、長良等之諸先生相会、雅筵を開候間、御閑暇候ハ、午后一時頃より御來駕奉祈候、若御差支有之候ハ、其趣一寸御報知被成下度候、草々、不宣 明治廿四年四月十三日 干城

桜洲先生 侍史

五五、寺島宗則

1、「中井様 寺島

拝復

拝読、過日中度々御惠訪被下候得共、病中失敬のミ申上候、一兩日余程宜敷、発声も稍復、何卒御出浮可被下候、景物共御風呂敷ニ包差上申候、且又銀小刀^者頂戴いたし度、併いくら差上候^而宜敷哉、不相分、別紙ハ肥後長左衛門^ニ為積申候、工費を加へ^{三十五両}^ニも可相成哉^杯噂いたし、併木工ノ見究故、御高慮難計、更^ニ加増可致義^{候ハ}、無御遠慮被仰聞度候、価ハいつ^ニも差上可申候、以上

五月四日

2、「中井弘殿 寺島宗則

拝復 親展

拝読仕候、別紙郷田氏よりまさ儀不縁^ニ付、離別被成度趣致承知候、本人^者不及申、親族共於^而引取候儀、大遺憾相覚候得共、不得已次第共、一同へ相語候処、今更異儀不申立候趣申出候、右、先方へ可然御通可被下候、毎々御配神謝言難尽候、頓首

正月十九日 寺島宗則

中井弘殿

3、「中井様 寺島

貴酬

御注文致承知、先々^江可申伝候、諸藩へ数万借用之儀名策也、頗^ニ御添勢所偏[□]、薩^ニ而者、僕等無策^ニ御座候、今日^者雨も歟、東行御早[□]奉察候、拝答、六朔

五六、徳大寺実則

1、拝啓、昨夜^者深更參堂御妨仕候、陳、土方を以伊藤伯被為召候処、午後三時汽車同伴出京候旨、電報有之候間、御含迄^ニ申陳候、早々、拝具 八月一日 徳大寺実則

山県老台下

五七、鳥尾得庵

1、「桜洲老人雅伯 鳥尾主人拝

拝復

拝読仕候、豚児病氣^ニて明日ハ出發致兼候、十二日、三日の兩日中にハ、必らず下坂致し可申候付、彼地^ニて御面晤可申上候、為其匆々、

十日 鳥尾

桜洲老人 座下

五八、長岡護美

1、「築地二丁目十番地 中井弘殿 飯田町三丁目十番地 長岡護美

侍史

若し兩日共御差支ナラハ、十五日^ニ御願候得共、仰願くハ兩日之中^ニ御決被下度候

過日、来る八日小はやし方へ罷こし候旨申上置候処、同日^者差支候間、

来る十日根岸拙亭へ御出被下度、伊集院君も彼小寰宇ハ末夕御覽無之
と存候ハ、ダルマ共も同地へ御出可然、八日ハ奈須見宮へ罷出候間、
旁十日之午后四時より御出被下度、御差支ナラハ九日ニても宜敷、此
段申上候間、貴答奉願候也、頓首

十二月五日 長岡護美

中井弘殿

尚々貴答奉願候

2、「中井弘殿 長岡護美

貴答

拜誦仕候、陳者明日ハ延遠館へ御招相成候へとも、明日者少々多忙ニ
而、何分參上難仕、甚夕遺憾之至ニ奉存候、何れ近日拜肩、御断可申
上、先ハ貴酬迄、如此御座候也

五月廿六日 長岡拝

中井君 侍史

3、「築地二丁目十番地 中井弘殿 外務省 長岡護美

親展

昨日者 貴翰御投与、生憎退省後ニテ 貴答延引、御海恕可被下候、小生
之処ハ、必御請申上候、尤、鍋島氏へハ今日申談候企ニ候也、随分御
自重、出発前一日伊集院氏一同御緩話申上度、勿々、頓首

二月廿六日 長岡護美

中井弘殿 侍史

4、「築地二丁目十番地 中井弘殿 外務省 長岡護美

侍史

愈御清安奉賀候、僕も愈以一旦洋行候間、出発以前拜晤之暇無之候間、
左ニ陳述候

一、□□や洋服一件者 鮫島、僕兩名之中、現実修行見聞之上、宮内省

へ御注文之事申入候方、可然との事ニ相決申候

一、物品等之出金ハ百武氏も同意ニ而候

僕のお葉へ贈る詞あり

揚柳橋西春可憐 佳人一曲隔花伝、巫山雲雨湘江月、都入清音落枕
處

七月 六日 長岡

中井君 侍史

五九、中山寛六郎

1、「京都市荒神口 中井弘殿 東京赤坂区榎木坂町老番地

親展

中山寛六郎

稍秋冷相催候、御同慶奉存候、陳ハ過日供高覽候望月より来翰、御覽
濟ニ相成候へハ、一応御返送被成下度奉願候、また含雪伯之清覽ニ供
シ不申候間、同伯へも供覽致し度と存候、先ハ用事ノミ、早々、頓首

八月廿一日 寛六郎

桜洲大人閣下

2、「中井元老院議官殿 中山寛六郎

親展

雀梅之時節、連日不勝之天氣ニ候処、愈御壯健ニ被為渡、敬賀之至ニ
奉存候、先達而、御出京中ハ度々失礼ノミ申上、多罪之至、御海恕可
被下候、扱、其砌御内示之望月小太郎儀、諸事好都合ニ相連ひ、来る

十四日横浜発之ビロー会社郵船アンコナ号ニテ渡航之事ニ決定、倫頓送り為替、其他諸事本人委敷合点致候、今日貴地江向ケ出発、神戸より乗船之手筈ニ御座候、山県伯より河瀬公使江添書も本人持参致し候、過日、望月江御示し相成り候取調事項ハ、頗る重要之件も有之、迨も一書生之微力ニテハ調査難成と存候ニ付、老兄より尤も大切とて懇示相成候分、数ヶ条たけ取調之方可然旨、本人江申聞ケ置き候、乍然、成業帰朝之際ニ至り、彼国之事情ニも貫通致し候ヘハ、諸事取調向十分ニ出来可申候ヘ共、夫迄ハ何分無寛束奉存候、本人より誓書之儀も、小生ノ文按ノ積リニテ相示シ置可被下候ヘハ、必らず可差上事と存候、書外ハ本人より御聞取り可被下候、早々、頓首

六月十一日 寛六郎

中井翁 座下

3、「京都市荒神口 中井弘殿 東京赤阪榎本坂老番地 中山寛六郎

親展

拝啓、陳ハ御来示之趣、含雪伯へ開陳致し候処、序之節、よろしく御伝へ可申との事ニ御座候、又供物之儀ハ、別ニ致し方も無之ニ付、鳩居堂之上香、沢山ニ取計ひ置き申候、御出京之節、委敷可申上候、早々、頓首

九月十七日 寛六郎

桜洲大人 座下

六〇 鍋島直大

1、「築地二丁目十番地 中井弘殿 永田町二丁目一番地

鍋島直大

本月四日、伊国皇族ジエクトジエト又殿下来臨ニ付、打毬相催候間、午後第二時三十分御来駕被成下度、此旨御案内申入候也

十二月二日 鍋島直大

中井弘殿

一伸、御着服之儀者、平常服乃フロックコート御着用ニ而可然、尤、雨天ニ候ハ、打毬相止メ可申候也

2、「中井弘殿 鍋島直大

親展

一翰拝呈候、然ハ先日、長岡護美ミニストルベヤ邸へ案内有之候節、如何之間違ひニ御座候や、出頭之左右ハ、全ク彼之家来失念ニテ、右案内状長岡手元迄相達シ不申処より、右へ参り懸リニ相移り候故、甚以恐縮之至リ御座候得者、同日列席之諸先生へ尊公より、右之間違之事者、御通知被下度奉希候、頓首

三月十九日 鍋島直大

中井弘殿

3、「中井弘殿 鍋島直大

御答 午後三時出ス

尊書拝見、直ニ宮内省へ申入、右之取計ひ可仕候也

十二月十六日 直大

中井賢兒